

題目 “目”が状況依存的規範を喚起する時—ビラの不適切放置行動に関する実験—

氏名 赤田 早裕美

指導教官 大沼 進

私たちは状況や人々といった周りの環境から影響を受け、自分がどのようにするのが適切かを判断しながら行動している。Aarts & Dijksterhuis (2003)は、ある状況で場面特定のな手掛かりによって喚起される規範(situational norm)が行動を規定すると論じている。規範を喚起する手掛かりとして“目”が有効という研究がある(Mifune, Hashimoto, Yamagishi et al, 2010; Bateson, Callow, Holmes, Redmond Roche, & Nettle, 2013) 一方で、目のポスターだけでは効果はないという指摘もある(Sparks&Barclay, 2013)。本研究ではどのような手掛かりが状況依存的規範を喚起するかを検討した。具体的には、人の存在を感じさせる状況を作り出し、その条件下で人がどの程度適切な行動をとるか教室という場面で、人物のポスターを掲示する条件、目を強調したポスターを掲示する条件、実際に人物が存在している条件を用意し、これらによって机の上や床に置き去りにされたビラを持ち帰るか否かを測定した。

実験は北海道大学の前期・後期と札幌大学の計 3 つの授業で、それぞれ連続した 6 週間でいった。最初の 1 週目に事前のベースラインを測定し、その後 2~4 週目に 3 種類の実験刺激（人物ポスター・目のポスター・実際の人物）を提示した。5 週目に事後のベースラインを測定した。この 5 週間の間、毎回、授業前にビラを配布し、授業後に机の上や中に何枚ビラが置き去りにされているかを測定した。6 週目に質問紙を実施した。

観察データから得られた結果では、ビラの置き去りの割合に関して、統制条件と人物条件を比較すると、片側検定で有意傾向がみられたが ($p = 0.094$)、その他の条件間には有意な差異が見られなかった。つまり、実際に人物がいる条件でのみ不適切な行動が減った。

質問紙の分析結果から、自己申告の行動（ビラを受け取ったか・持ち帰ったか等）と実験刺激に気づいたか、気になったか、ビラと実験刺激に関係があると思ったかという項目との相関関係はみられなかった。従って、実験参加者は気付かないうちに、実験刺激からの影響を受け、行動していたと考えられる。本研究の結果から、ビラの置き去り行動をはじめとする様々な行動を抑制・促進するためには目の提示だけでは不十分で人の存在が重要であると結論づけられる。